山形県 授業スタンダード
～指導技術の基礎・基本編～

山形県教育委員会

２０２６．４月～　Ver.1

NotebookLM

目次

Ⅰ　はじめに

Ⅱ　基本的な考え方
～「確かな学力の育成」推進の方向性の視点～

Ⅲ　指導技術の基礎・基本
○　教師の話し方
○　発問
○　学習形態の工夫
○　話し合い活動や聞き方の指導
○　机間指導
○　板書
○　ノート指導
○　ワークシートの活用

Ⅳ　おわりに

Ⅰ　はじめに

今、学齢期にある子どもたちが活躍する社会は変化が激しく、我々大人の経験則では対応が難しい状況になると思われます。現在、本県でも人口減少、少子高齢化が一段と進み、地域課題の解決が急がれています。このような未来を力強くしなやかに生き抜き、個人と社会のウェルビーイングを実現する人へと成長するためには、義務教育の段階で一人ひとりに「確かな学力」を育成することが必要です。

未来を担う子ども一人ひとりに学力をしっかりと身に付けさせることは、学校の最大の役割です。とりわけ、学校で教育に携わる教師の役割は非常に重要です。我々教師は、子どもたちが分からなかったことを分かるように、できなかったことをできるようにすることが職務であるとともに、日々子どもの成長を見届けられることは、教師としての最大の喜びでもあります。

では、どうすれば一人ひとりの「確かな学力」を伸ばすことができるのでしょうか。近年、様々な学力向上の手法や考え方がある中、県教育委員会では、全国学力・学習状況調査の結果等を分析し、学力向上の方針として、次の３点を柱に取組みを進めていくこととしました。

一つ目は、「教師の指導力向上」です。

「確かな学力」の育成に向け、我々教師は様々な機会を捉えて学び続けていく必要があります。校内での授業研究や校外の研修会などは、学びの宝庫です。手法を学ぶだけでなく熱意も感じ取りながら、自身の指導力を高めてほしいと思います。

また、日々の授業を振り返り、授業改善を行う営みの積み重ねにより、指導力は高まっていくものと考えています。そこで、この度、明日からの授業改善の実践につながる一助となるよう願いを込めて「山形県 授業スタンダード」を作成しましたので、自身の授業改善の参考として活用してください。

二つ目は、「学習定着度に基づく授業改善」です。

どの教科等においても、テストや実技などで児童生徒の学習定着度を把握し、その結果を授業改善にいかすことは、学習内容の確実な定着を図る上で非常に重要です。

令和７年度から算数・数学、英語の評価問題にＣＢＴ（Computer Based Testing）を導入しました。このＣＢＴを活用することにより、子ども一人ひとりの学力の状況をしっかり把握し、その後の授業改善や学習改善につなげるサイクルの構築を目指しています。

三つ目は、「家庭学習の充実」です。

授業での学びを広げたり、より確実なものにしたりしていくためにも、子ども一人ひとりの実態に応じて、継続的に家庭学習を進めていくことが求められます。

この度作成した「山形県版 家庭学習の手引き」をもとに、家庭学習の目的や具体的な事例を参考にしながら、家庭学習の質と量を充実させてほしいと思います。

以上、「教師の指導力向上」「学習定着度に基づく授業改善」「家庭学習の充実」が三位一体となって、子どもたち一人ひとりの学力が向上することを願ってやみません。

「先生、見て見て！こんなことができるようになったよ！」

「なるほど、そういうことか！じゃあ自分でやってみよう！」

県内すべての子どもたちが、自分でできることを増やし可能性を広げ、たくましくしなやかに未来を生き抜く「確かな学力」を身に付けて大人へと成長し、社会を担う姿を想像しています。

令和８年３月　　山形県教育委員会

Ⅱ「確かな学力の育成」推進の方向性の視点

三位一体の実践（推進の3つの柱）

学習定着度に基づく授業改善

多様な調査データから実態を把握し、全教職員で課題を共有して改善を図ります。

教師の指導力向上

『授業スタンダード』を常に活用し、自身の指導技術を振り返りながら向上に努めます。

家庭学習の充実

授業と連動した予習・復習を行い、発達段階に応じた学習習慣を定着させます。

授業改善に向けたサイクル

実態把握と結果分析

各種調査やCBT等の結果を分析し、児童生徒の課題を明確にします。

補充学習と授業改善

分析に基づいた手立てを講じ、日々の授業実践と補充学習へつなげます。

授業実践の継続的改善

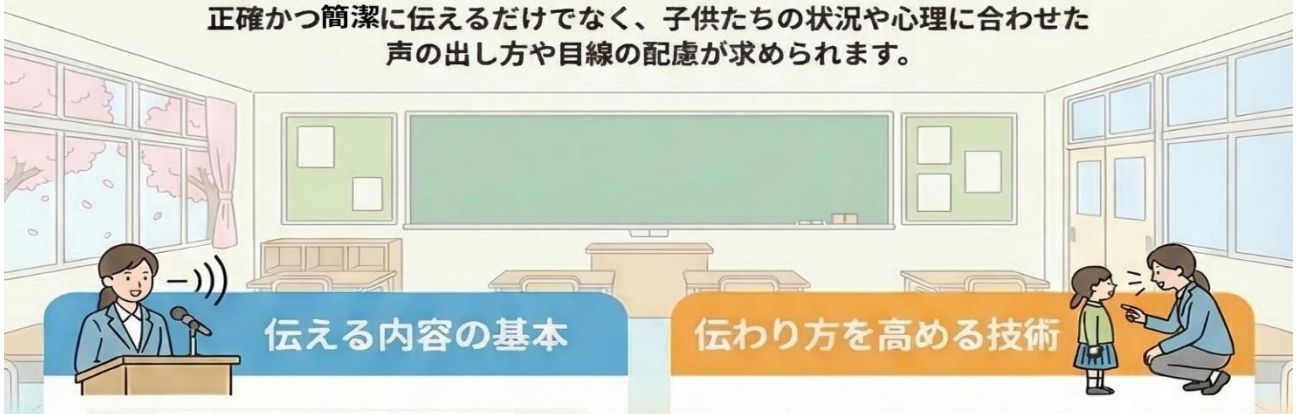
改善した授業を実践し、再び実態を把握する循環を繰り返すことが重要です。

NotebookLM

Ⅲ　指導技術の基礎・基本

教師の話し方

教師の話し方は、児童生徒の学習意欲や理解度に直結する重要な指導技術です。
正確かつ簡潔に伝えるだけでなく、子供たちの状況や心理に合わせた
声の出し方や目線の配慮が求められます。



伝える内容の基本

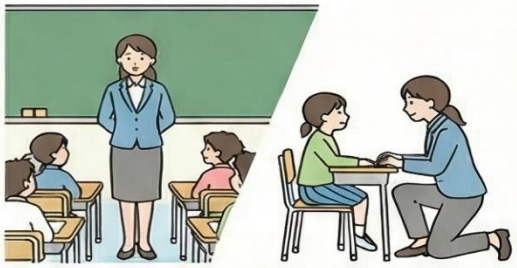
正確さと分かりやすさを心がけます
内容を端的にまとめ、子供たちが「聞きたい」と思える話し方を工夫します。

児童生徒の聞く姿勢を確認します
教室全体が注目しているか、おしゃべりをしていないかを確認してから話します。

理解しているか確認しながら話します
一人ひとり解釈が異なることを踏まえ、正しく伝わっているか常に意識します。

伝わり方を高める技術

声の強弱・高低・間を意識します
速さや「間」も加味し、聞き手を意識したリズムで話すことが大切です。



全体：凛とした態度　　個別 子どもと同じか低い目線

状況に合わせて目線の高さを変えます
全体へは凛とした態度で、個別指導では子どもと同じか低い目線で話します。

表情や語尾などの印象に留意します
場面に応じて、全体で話すか個別に対応するかを適切に見極めます。

NotebookLM

発 問

「発問」は、子どもの思考を促すための意図的な問いかけであり、授業構成の核となる技術です。「指示」とは異なり、教材研究や実態に基づいた計画的な問いかけが、深い思考を引き出します。

効果的な発問のポイント

ねらいを明確にし、子どもの応答を予測します。

思考を深める発問を吟味し、回答を扱う順序まで事前に計画します。

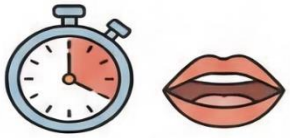
子どもの実態に合わせた課題設定を行います。

一部の子どもだけが盛り上がったり、意欲を低下させたりしない配慮が必要です。

教材や教具を工夫して、疑問を引き出します。

写真や具体物を提示し、子どもの驚きや疑問を学習課題につなげます。

留意すべき点（避けるべき例）

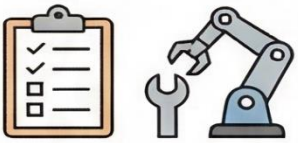


思考を妨げる「矢継ぎ早」な発問は避けます。

矢継ぎ早に問いかけると、子どもがじっくり考える時間を奪ってしまいます。

意図する「答え」を含んだ発問は避けます。

教師が求める正解や感想を誘導する問い方は、思考を促しません。



「指示」のような具体的すぎる発問は避けます。

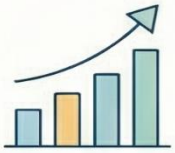
ヒントが具体的すぎると、思考ではなくただの作業になってしまいます。

NotebookLM

学習形態の工夫

子ども一人ひとりの学習意欲を高め、
学力やコミュニケーション能力を育む

学習形態を工夫する意義



学習意欲と成果の向上につながります

一斉学習のみに偏らず形態を工夫することで、全員が主体的に参加できます。

多様な能力を育成できます

基礎的な知識の習得に加え、対話を通じたコミュニケーション能力も育ちます。

実践における3つの重要ポイント

「目的」を明確にすること

学習形態の変更はあくまで「手段」であり、授業 のねらい達成を優先します。

適切な指導と個別の支援を行うこと

活動の切り替え時には明確な指示を出し、次の活動へ向かえるよう支援します。

各形態を効果的に組み合わせること

知識伝達は一斉、深まりは小 集団（3〜4人）、内省は個別と使い分けます。

学習形態	適した場面・特徴	留意点
一斉学習	基礎事項の説明、指示、全体の共有	聞き役だけにさせない工夫が必要
小集団学習	意見交換、助け合い、比較検討	3〜4名が学習時間を確保しやすい
個別学習	自分の考えの整理、振り返り	前後の学習形態との接続を意識する

NotebookLM

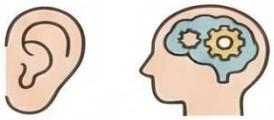
話し合い活動や聞き方の指導

授業における話し合いは、他者の考えと比較・検討することで自身の考えを深める重要な活動です。円滑な話し合いを実現するためのポイントをまとめました。

指導のポイント（話し方・聞き方）

結論と根拠を明確にした話し方の指導

結論を先に述べ、理由を添えるルールを事前に共有し、定着させます。



思考を深める「聞き手」の育成

要点を捉え、自分の考えと比較しながら聞く力を発達段階に応じて育てます。

活用できる「話型」の提示

比較（同じ点は…）や関連付けなどの具体的な型を示し、継続的に使います。

授業づくりの工夫と留意点

話し合う必然性のある課題設定

目的を明確にし、形態（グループ等）や時間を適切に割り振ります。

全体での共有と個人の整理

特定の意見に偏らず、児童生徒同士の考えが深まるよう教師が支援します。

思考を深める「話型の例」

比較・分類

「同じ点は○○で、違う点は△△です。」

関連付け

「○○に関連することとして、△△が挙げられます。」

規則性

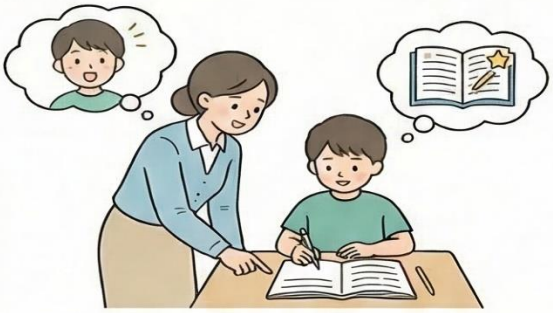
「○○の結果から、△△のような規則性が見いだせます。」

NotebookLM

机間指導

机間指導は、一人ひとりの学習状況を把握し、個別の支援を
次の授業展開につなげるための重要な指導技術です。
単に教室内を歩くのではなく、明確な意図を持って
子どもたちと関わることが求められます。

机間指導の3つのポイント



学習内容の個別支援をします

つまずきを把握し、進度や理解度に
応じた発展課題の提示も行います。

子どもの考えを次の展開に生かします

よい手本や反対意見をもつ子を把握し、
意図的な指名や発表につなげます。

一人ひとりを励まします

飽きが見られる子やつまずいている子へ
肯定的な声がけを行います。

効果を高めるための留意点

明確な意図をもって回ります

何のために机間指導をするのか、
授業展開に応じた目的を意識します。

指導の振り返りと支援計画に活用します

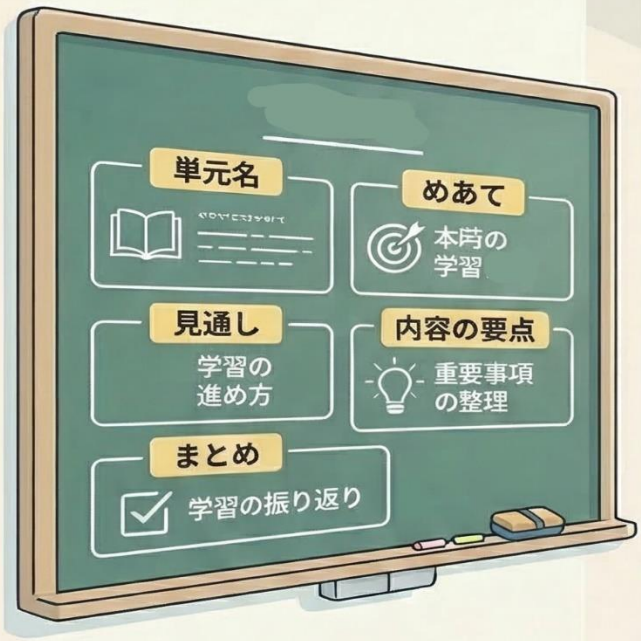
把握した学習状況を、これまでの指導
の改善や今後の計画に反映させます。

NotebookLM

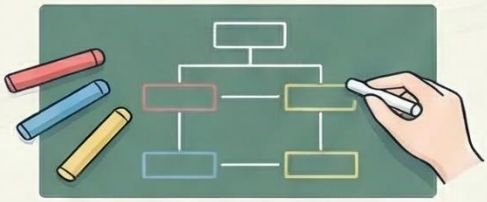
板書

分かりやすい板書の構成要素

学習を支える5つの基本項目



視覚的な理解を助ける工夫



色の使い分けや図表を活用し、
一目で内容が分かる状態を目指します。

ノート指導との連動

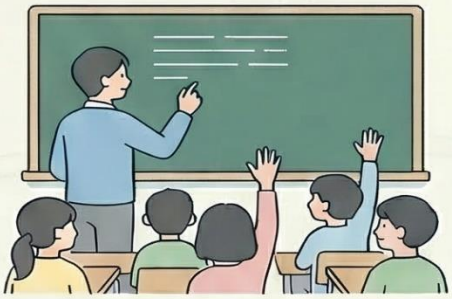
正しい筆順で書き、
ノートのモデルとなるよう意識します。

板書の実践的な留意点

事前のレイアウト計画

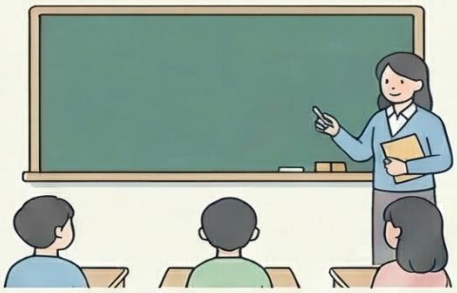
授業の最後にどのような板書になるか、
事前にイメージして構成します。

適切なタイミングとスピード



子どもの発言や思考の速さに合わせ、
反応を見取りながら書き進めます。

配慮された立ち位置



子どもたちの視線を遮らないよう、
書く際の位置にも注意を払います。

板書は、授業の流れを視覚的に整理し、子どもたちの理解や思考を助ける重要な手段です。
学習のねらいを明確にし、ノート指導と連動させることで、学習内容の定着と意欲向上を目指します。

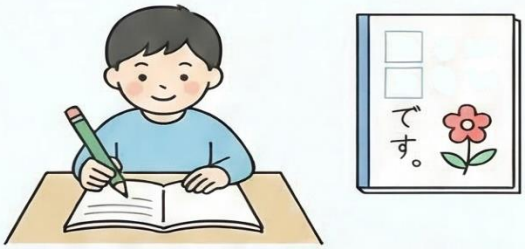
NotebookLM

ノート指導

ノート指導は、発達段階に応じた適切なアプローチを行うことで、
児童生徒の学習意欲向上や理解の深化に直結します。各学年段階での
指導の重点と、全ての段階に共通する指導上の習意点を整理しています。

学年に応じた指導のステップ

【低・中学年】
書く習慣と記録の力を育てます。



正しい書き方の指導から始め、自分の
考えを記録する習慣を付けます。

【高学年】思考を整理し、
工夫する力を伸ばします。

思考の流れが分かる工夫や、図表を用いた
振り返りやすいノート作りを指導します。

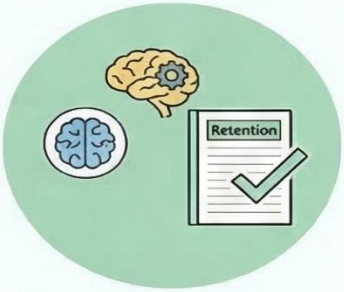
【中・高等学校】情報を活用し、
理解を深める力を養います。

小学校での基礎を踏まえ、目的意識をもっ
て情報を整理・活用する力を育てます。

指導で大切にしたい3つの視点

振り返りができる
「学習の足跡」を残します。

復習に活用できるよう、振り返り欄を
設けるなどの工夫を促します。



丁寧に書くことで
「学習内容の定着」を図ります。

丁寧に書く習慣を付けさせ、
知識が定着するように導きます。

自分の言葉や図表で
「考えをまとめ」ます。

事実を基に自分の言葉でまとめ、
新たな気付きや思考を促します。

NotebookLM

ワークシートの活用

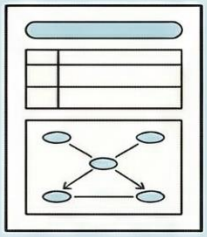
ワークシートを活用するねらい

子どもの学びを充実させる

知識の定着、思考の活性化、
学びの振り返りを効果的に促します。

ノートとの役割分担

ノート

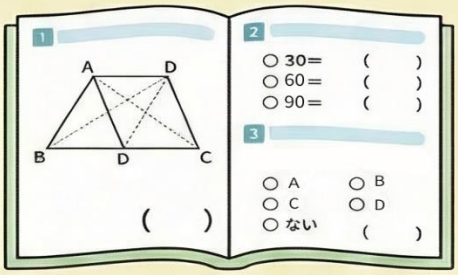


ワークシート

あらかじめ図表や枠組みがある特徴を活かし、ノートと使い分けます。

効果的な活用のポイント

思考の手がかりを与える

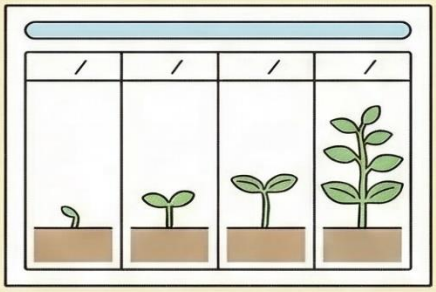


算数の補助線や理科の選択肢など、考えるヒントを提示します。

考えを構造化し、まとめる

国語の段落構成や登場人物への思いなど、視覚的に整理させます。

学習の足跡を可視化する



植物の成長記録などの蓄積を通じ、自分の学びを振り返らせます。

NotebookLM

Ⅳ　おわりに

教育の営みは、知・徳・体を兼ね備え、将来を担う人材を育んでいくことにあります。特に知の根幹をなす学力については、子どもたち一人ひとりに学ぶ楽しさや分かる喜びを感じさせながら、基礎的・基本的な知識・技能を習得させるとともに、それらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育み、主体的に学習に取り組む態度を養うなど、「確かな学力」を育成することが大切です。このような「確かな学力」を土台として、児童生徒一人ひとりが意欲的に個性や可能性を伸ばしていくことが求められます。

子どもたち一人ひとりが「確かな学力」を身に付ける場は、何といっても日々の授業です。とりわけ、「基礎的・基本的な学習内容の定着及び活用」と「自分で考え、表現する探究的な学び」のバランスに配慮しながら、子どもたちが「分かる・できる喜び」と「学ぶ・考える楽しさ」を味わうとともに、教科で学んでいる内容と地域や社会とのつながりを実感できる授業づくりを進めることが大切です。

そのような授業を行うための基礎・基本を、この「山形県　授業スタンダード～指導技術の基礎・基本編」として示しました。また、授業で身に付けた力を確かなものにするため、定期的に学習の定着度を確認する取組みの一助として、ＣＢＴによる評価問題の活用に向けた「学習定着度に基づく授業改善に向けたＣＢＴ活用マニュアル」を作成しました。これらを校内研修や自己研鑽において活用し、教師一人ひとりが自身の授業力を高めることが重要です。

教科、学年、学習内容等により、それぞれの授業は異なりますが、基礎・基本となることは同じであると考えます。日々の授業づくりにおいて、この「山形県　授業スタンダード～指導技術の基礎・基本編」を参考にしながら、子どもたち一人ひとりに「確かな学力」を身に付けさせる授業を、仲間とともにつくりあげていきましょう。

教育は、未来をつくる仕事である。

我々教師は、そのことに誇りと責任を持ち、日々、子どもと向き合うとともに、自ら学び続ける存在でありたい。